

エッセーに向き合いながら感じたこと

名城大学法学部教授 野上 博義

国際書房のK氏に求められるがまま、この裏表紙に小さなエッセーを載せることになった。そして今、頭を抱えながらその作業に向きあっている。まず、エッセーとは最もフランス的な知的生産の形であり、モンテーニュの試論のように、深い知識と豊かな発想力が求められる。フランスに触れた者であれば、ただ気後れするばかりである。それだけではない。エッセー、エッセー、この「エ」の列の連続音が気持ちを重くする。思い起こせば、学校に通い始めてから今日まで、「エ列音」の言葉に次々と追いたてられてきたのである。勉強して成績を上げ、練習して結果を出し、研究して成果をまとめる。それらは内面からではなく外的な力として、人に纏わりつく音節ではなかったか。

その一方、ごく身近なところでは、「エ列音」が極めて少ししか使われていないことに気がつく。まず、日本人の氏名にその音が使われることは稀である。周囲を見て確認していただきたい。人名だけでなく地名も同様である。47ある日本の都道府県名の中に、「エ列音」は5字しかない。都市についても大差はない。たまたま私の勤め先も所在地(天白区)も、担当教科(西洋法制史)も、すべて「エ列音」から始まっているが、それは稀有なことなのである。原因は推測できる。よく知られているように、もともと日本語に「エ」の音はなかった。後に生まれるが、まともな普通の言葉はそれ以外の列音で既に占められていたのであり、それがために、言語学者の大野晋氏は「エ列音で始まる言葉は概していい意味を持たない」と言い切る。

他方、西欧語になると状況は異なる。英語では、最も多く用いられるアルファベットが「e」である。E.A.ポーの『黄金虫』で、暗号が解読される鍵がそこにあり、『踊る人形』のシャーロック・ホームズが、最も普通のポーズの人形が「e」を表すことを見抜き、暗号を解いたのもその事実に基づいている。フランス語も同様であり、「e」は動詞の重要な部分であり、時制の表現にも欠かすことができない。名詞の中に使われる頻度についても当てはまるのではないかと思う。従って、西洋の事物が日本に紹介されるにあたって、カタカナ表記が使われれば、そのまま「エ列音」の言葉(発音がイヤウの場合もあるが)が溢れたのであろう。実際には明治期、西欧語は翻訳語に形を変えるのだが、それが漢語であることにより、それでもなお、同じくよそよそしい言葉が作り出される。漢語には「エ列音」が多く含まれているのである。法律用語にそれを見てとることができる。

現在、漢籍から作られる漢語の中で、絶えず目にするものとして元号がある。そして、歴代の元号で使われた漢字のトップスリー、「永」「元」「天」はまさに「エ列音」の字句となる。残り一年となった「平成」は、その連音である点において、典型と言えよう。その「平成」に比べて、「昭和」に親しみを感じる方が多数だろうが、それは単に世代のノスタルジーとか、時代の激動とかで片づけられるものではなく、どこか、その響きから来るものでもあると思う。さて、次の元号はどのような響きになるのだろうか。

カタカナ表記が一般化した今、私にはエッセーよりも苦手なものがある。「エス・エヌ・エス」(SNS)である。自分をさらけだし、加工し、押しつける。しかも安直な手段と言葉によって。文化的に何か違っているように思う。嫌な「エ列音」がここにもある。

皮相なエッセーになった。「似非」なるものと言われれば、ただ恥じ入るのみである。